

瑞兆の鶴翼

衛地朱丸

表紙絵/an じえら

極東燃萌帝國

*注意、本書をお読みになる前に

本書は、史実を基に艦娘で表現した本となります。具体的な時間が書かれているシーンは史実のエピソードですが、それ以外の部分は創作したものです。

また、各種設定は基本艦これ準拠とするので、一部当時の日本の技術水準とは異なる描写がありますので、ご了承くださいませ。

作中での時間は注意事項がない限り、基本的に日本時間とします。

史実を基にしている関係上、直接的または間接的な艦娘の死亡描写があります。

艦娘の年齢は具体的には明記していませんが、モデルとなった艦の艦齢に準拠します。

一部を除き、艦これ未登場艦娘には台詞がありません。

本書をお読みになる際は、以上のことにご注意いただければ幸いです。

瑞兆の鶴翼

目次

序章

在りし日の追憶 6 P

第一章

MO作戦～史上初の空母戦～ 7 P

第二章

カ号作戦～機動部隊最後の勝利～ 3 1 P

第三章

あ号作戦～片翼の潰える日～ 5 4 P

第四章

捷号作戦～矢尽き刀折れるその日～ 6 8 P

最終章

静かなるレイテの海へ 8 4 P

後書き 8 6 P

序章・落日の洋上にて

「東の空に旭日が上がったわ！ あれこそ我等が御旗の象徴！！ 各艦発艦準備に入ってください！」

昭和十六年十二月八日〇一二〇。赤城先輩の関の声を皮切りに、真珠湾攻撃の火蓋は切って落とされたわ。あの時の私はまだまだ新米で、一航戦、二航戦の先輩たちに追い付こうって、必死に背中を追い駆けてたっけなあ。

「そんなことも、あつたわよね……」

落日の洋上に舞う楓の落葉に身を寄せながらふと昔の情景を思い出し、私は少しだけ感傷に耽った。

迷彩柄の弓道着に身を包み、私は間もなく最後の航海へと抜錨する。

決戦の前に揃えられた艦載機は、たった一六機。計三四機の大編隊で空を埋め尽くした真珠湾の時のような光景は、もう二度と拝めない。

私が率いる空母娘は、瑞鳳、千歳、千代田の三人。

みんな改装空母で、生まれた時から空母だったのは私だけ。

そう——真珠湾の時六人いた空母娘で生存してるのは私だけ。一航戦、二航戦の先輩たちも、ずっと一緒だった翔鶴姉も、もうこの世にはいない。

機動部隊としての能力を既に失っていた私たちに与えられた任務は、レイテ湾に突入する戦艦部隊の囷として、敵機動部隊を引き付けること。この艦載機じゃ生きて帰るのは不可能。どれだけ粘って陽動できるかが勝負だ。

大鑑巨砲の時代を終焉に導き、新たな戦場の主役へと躍り出た空母部隊に与えられた最後の任務が囷だなんてねと、私は溜息を吐くしかなかったわ。

（翔鶴姉、待っててね。この戦いが終わったら、そっちに行くから……）

翔鶴姉の形見である鉢巻をギュッと握りながら死を覚悟した瞬間、私の脳裏には、走馬灯のように在りし日の情景が浮かび上がったわ。翔鶴姉と一緒に駆け巡った、激戦の数々が……。

第一章・MO作戦～史上初の空母戦～

昭和十七年。開戦以来連戦連勝を重ねて来た聯合艦隊は、米国と豪州との補給路を断つために、ニューギニア島ポートモレスビーを攻略するMO作戦を発案したわ。

ポートモレスビーの北方に位置するラエは既に占領しているんだけど、この間には標高三〇〇〇メートルを超す山脈が広がっているの。そんな山脈を越えての陸上攻略は困難を極めるから、私たち艦娘が海上から攻略しようってことになったってわけ。

MO作戦の一環としてツラギを攻略したんだけど、この時敵機動部隊が発見されて、ポートモレスビー攻略の最中、会敵する可能性が出て来たのよ。

「いよいよね！ 翔鶴姉!!」

私はこの報を聞いて、胸がワクワクしたわ。

だって対空母戦は、一航戦、二航戦の先輩たちもまだ経験してないんだもの。新米である私たちが空母戦

においては先輩たちの先を行けるんだから、そりゃ喜ばない方がおかしいってもんよ。

「えっ、ええ。そうね……」

「翔鶴姉？」

翔鶴姉は頷いてくれるけど、何だか妙によそよそしかったんだ。

「ひよっとして、緊張してる？」

「ええ。だって部隊を指揮するのは初めてだし。先輩たちのように上手くできるかしらって思ってしまうわ」

瑞鶴のように空母戦ができるのは楽しみだけど、それ以上に旗艦としての任務を全うできるかが不安だつて、翔鶴姉は胸の内を明かしてくれたわ。

翔鶴姉の気持ちもよく分かるな。真珠湾、ラバウル、セイロン沖。私たちはいつも先輩たちの指揮の元作戦に従事してきた。今回その先輩たちはいなくて、私たち五航戦が主役だもん。

私先輩たちの見ていないところで頑張るぞって張り切ってるんだけど、いざ指揮しろって言われたら緊

張でガチガチになっちやうだろうなあ。

「大丈夫だって！ 翔鶴姉は一人じゃない。私が付いてるんだもん」

妹の私がしっかりとサポートしてあげる。だから翔鶴姉が心配することは何もないわって、私は励ましたのよ。

「そうね。私には瑞鶴が付いていてくれる。一人じゃできないことでも二人なら絶対できるわよね！」

二人一緒に作戦を成功に導きましょって、翔鶴姉はギョツと私の手を握ってくれたんだ。

「うん！」

二人一緒なら絶対大丈夫。私たちは姉妹の絆を再確認しながら五月一日、トラック泊地から作戦海域へと進出したのよ。

「瑞鶴、索敵機発艦よ！」

五月七日〇四〇〇、作戦海域である珊瑚海に到達した私たちは、索敵機を発艦させたわ。敵機動部隊の進

出は間違いないんだから、無事に見つかればいいんだけど。

「やったわ、瑞鶴。敵機動部隊発見よ！」

〇五二二、翔鶴姉の索敵機が早くも敵艦隊を発見したわ。敵艦隊の位置は方位一八二度、距離一六三海里。

続いて〇五四五、敵戦力の報告が上がったの。それによると、敵は空母と巡洋艦各一隻ずつに、護衛の駆逐艦が三隻随伴してるみたい。

「やったあ、翔鶴姉！」

こんなに早く敵機動部隊を発見できたなんて運がいわって、私は喜びながら攻撃隊の発艦準備に努めたのよ。

「第一攻撃隊、発艦してください！」

「第一攻撃隊、行くわよ！」

私は翔鶴姉と一緒に弓を構えながら、〇六〇〇から〇六一五にかけて南方に矢を放ったわ。

矢は次々と三種の艦載機へと変化し、颯爽と敵艦隊へと飛び立ったのよ。

数は、翔鶴姉が零戦九機、九九式艦爆一七機、九七



M O 作戦参加艦娘

M O 機動部隊

主隊

第五戦隊 重巡洋艦妙高、羽黒

第七駆逐隊 駆逐艦曙、潮

航空部隊

第五航空戦隊 航空母艦翔鶴、瑞鶴

第二十七駆逐隊 駆逐艦有明、夕暮、白露、時雨

M O 攻略部隊

主隊

第六戦隊 重巡洋艦青葉、衣笠、加古、古鷹

航空部隊

航空母艦祥鳳 駆逐艦漣

ポートモレスビー攻略部隊

第六水雷戦隊 軽巡洋艦夕張 駆逐艦追風、朝風、睦月、弥生、望月

敷設艦津軽

援護部隊

第十八戦隊 軽巡洋艦天龍、龍田

水上機母艦神川丸、聖川丸

式艦攻一一機の計三七機。私が零戦九機、九九式艦爆一九機、九七式艦攻一三機の計四一機。二人合わせて総計七八機よ。

「瑞鶴、また敵艦船を発見したみたいよ」

発艦に動しんでいる〇六一〇、さつき敵艦隊を発見した翔鶴姉の索敵機がまた部隊を発見したみたい。数は重巡洋艦と油槽船一隻ずつで、距離はさつき発見した部隊から南東に二五海里のようね。

「目標は空母だから、そっちは無視してもいいわよね」
「そうね。まずは空母を確実に叩くことを優先しましよ」

私と翔鶴姉は一緒に頷いて、敵空母の撃沈を最優先事項としたのよ。

第一次攻撃隊を発艦し終えて間もない〇六二〇、別動のMO主隊の古鷹さんから敵空母部隊発見の報が続いて〇六三〇、衣笠さんから発見した敵空母部隊の詳細が打電されたわ。

その報告によると、敵は戦艦一隻、巡洋艦二隻、空母一隻みたい。古鷹さんたちから伝えられた情報を整

理すると、敵艦隊の位置はこっから方位二八〇度、距離二五〇海里みたいね。

そして厄介なことに、敵艦上機はもう攻撃に入ったとの情報も入って来たわ。

「翔鶴姉、どうする？」

MO主隊所属の空母娘は、改装空母の祥鳳たった一人。正直正規空母相手じゃ戦力的に不利。戦闘はもう始まっているのだから、一刻も早く救援に向かいたいところなのだけれど。

「そうね。二五〇海里だと、今から艦載機を飛ばすのは困難ね」

私たちも敵機動部隊を発見したんだし、後顧の憂いを絶つ意味でもそっちの対処を優先しましよって、翔鶴姉は自分の考えを言ってくれたわ。

「分かったわ、翔鶴姉」

確かに、救援に向かっている間に背中から撃たれたら意味ないもんね。

そうして翔鶴姉は〇七〇〇に、南東の敵を撃破した後、西方の敵を叩く旨をMO主隊に打電したのよ。

「えっ!? 何ですって!?!」

○七三〇、攻撃隊からの報告を聞いた翔鶴姉は、青ざめた顔で狼狽したわ。

「どっ、どうしたの翔鶴姉?」

これから攻撃に移ろうって時にどうしたのかしらって、私は怪訝に思いながら訊ねたのよ。

「今あつた報告だと、攻撃目標は空母じゃなくて、油槽船みたいなものよ……!」

「えっ、ええー!?!」

翔鶴姉の報告を聞いて、私も驚きを隠せなかったわ。

だって確かに油槽船は発見したけど、それは空母から離れて……。どうということなの!?!

「攻撃はしばらく待って。敵空母の搜索を最優先にして!」

翔鶴姉はおたおたしながら、搜索を命じたわ。私も胸に不安を抱きながら、吉報が届くのを期待していたのよ。

「翔鶴姉、少しでも西方の敵との距離を詰めていた方がいいと思うわ!」

○七四五、私は翔鶴姉に自分の意見を伝えたわ。南東海域に敵空母部隊がいるかどうかは不確定になっちゃった。なら、MO主隊と合流して確実に敵を倒すのを優先しなきゃって。

「そうね。各艦反転、針路二八〇度で西進してください!」

○八四二、翔鶴姉は機動部隊を敵機動部隊のいる西に向けたわ。これで無事に南東海域の空母を発見して攻撃を終えて、後顧の憂いを絶って合流できればいいんだけど。

「そっ、そんな……見つからないだなんて……!」

だけど、私たちの期待空しく、敵空母は見つからなかったわ。

○八五一に受信した報告によると、先に発見した空母は、後から発見した油槽船の誤りだったみたい。つまり翔鶴姉の索敵機は、同じ敵を違う部隊と誤認して報告したってことになるわ。

「どっ、どうしようかしら、瑞鶴。空母がいなかっただなんて……!」

私のミスで取り返しをつかないことをしてしまつたわつて、翔鶴姉はおたおたと慌てふためいてしまつたわ。

「落ち着いて、翔鶴姉！ とにかく敵空母がいないなら攻撃する意味はないわ!!」

油槽船を相手してる暇があつたら、一刻も早く攻撃隊を掃投させて全力で西進しなきゃつて、私は翔鶴姉に意見したのよ。

「そつ、そうね！ M〇機動部隊は第一次攻撃隊を収容後、西方の敵艦隊に向かいます」

翔鶴姉は落ち着きを取り戻して、〇九〇〇、他部隊に機動部隊の行動予定を打電したわ。後は早く艦載機が戻つて来るのを願うばかりね。

「一二〇〇、第二次攻撃隊を発艦の後、西方の敵空母部隊を攻撃します。各部隊は極力敵空母の所在並びに行動予定を報告してください!」

一〇〇〇、翔鶴姉は他部隊に索敵をお願いしたわ。

今まで索敵の失敗で無駄な時間を費やしてたんだもん、当然よね。

「えっ!? 嘘でしょ……!? そんな、そんなあ……」

それから間もなくして電報があつただけど、報告を受けた途端翔鶴姉は、全身をガクガク震わせながら取り乱したのよ。

「翔鶴姉! 何が、何があつたの!?!」

この取り乱し様は、さっきの誤認のレベルじゃない。もつと深刻な、精神に異常をきたすような悲報が届いたに違いない。私は声を荒げて翔鶴姉に訊ねたのよ。

「祥鳳が、祥鳳が、敵艦載機の集中攻撃を受けて轟沈したつて……」

「そんなつ!? 祥鳳がつ!?!」

翔鶴姉から訃報を聞いて、私も頭をガツンと殴られたような衝撃を抱いてしまつたわ。

祥鳳は改装空母として今年の一月に竣工したばかり自分よりも若い空母娘が生まれたんだつて、喜んでいたの。それだけに、私のショックも大きかつたわ。

「どうしましょ、瑞鶴……。私のせいだわ、私のせいで祥鳳は……」

最初から油槽船だつて分かつてれば、攻撃隊を発艦

させることなく西進できていた。そうすれば救援に駆け付けられて救えたのにつて、翔鶴姉は後悔の念に駆られて、嗚咽交じりの声で泣き続けたわ。

「翔鶴姉、気持ちは分かるよ！ 私だって悲しいよ。でも、今は戦闘中よ！」

泣いてる暇があったら一刻も早く向かわなきゃって、私は自分の気持ちを抑えながら翔鶴姉を励まし続けたのよ。

「だって、だってあの子、妹さんと一緒に戦えるのを楽しみにしていたのよ……」

「!?」

そう——祥鳳はお姉さんだ。先に空母に改造された瑞鳳がいるんだった。

「妹に遅れたけど、ようやく空母娘として竣工できた。早く一緒に戦えたらなって、私に楽しみに話してたのよ……。その夢を叶えることができなかつたなんて、あんまりだわ……」

翔鶴姉は、自分と同じ姉な空母娘の祥鳳に親近感を抱いていたんだ。だから、喪失感は私なんかと比べよ

うにならないのね……。

「……」

私はふと、自分を瑞鳳の立ち位置に置き換えてみたわ。姉より先に改造が終わったら、申し訳ない気持ちになるし、一緒に戦えるのが楽しみに決まっている。にも関わらず、姉が先に逝ってしまったら……。

（ヤダよ、ヤダよそんなの……）

一度も姉と一緒に戦えないまま生き別れるなんて、そんなの私には耐えられないよ……。

私は生まれた時からずっと翔鶴姉と一緒にいた。瑞鳳のことを思うと、自分は何て幸福なんだって思ってしまう。

「翔鶴姉の気持ち、よく分かったよ。でもやっぱり、泣いてる時じゃないよ」

私は心を落ち着かせながら宥めたわ。仲間の死は悲しむべきことだ。でも、悲しいなら尚更戦わなきゃならないって。

「艦載機は十分にある。私と翔鶴姉が力を合わせれば、絶対勝てるよ！」

だから急いで駆け付けて祥鳳の仇を討とうよって、私ほどにかく翔鶴姉を励まし続けたんだ。

「瑞鶴……そうね。こんなところで泣いてるわけにはいかないわね」

翔鶴姉は私の言葉を聞き入れてくれて、気を落ち着かせてくれたわ。

「ありがとう、瑞鶴。あなたがいなかったら、私は一人泣き続けていたわ」

自分と祥鳳を重ねる余り正気を失って部隊指揮を取るのとは不可能だったわねって、翔鶴姉は感謝の言葉を向けてくれたわ。

私もよって頷いて、私たちは艦載機の収容を急ぎつつ、西を目指したのよ。

攻撃隊は一〇三〇から一一〇〇にかけて、大部分は収容できたわ。その間もたらされた戦果報告によると、誤認した油槽船と護衛の駆逐艦一隻を撃沈してみたわね。

「戦果には変わらないけど……」

その二隻と空母娘一人じや、全然釣り合わない！最低でも敵空母一隻は沈めなきゃ仇討ちにはならないわって、私は闘志を燃やしたのよ。

「そう、そんなに離れているのね……」

私たちの元には、逐一敵の位置情報が入って来たわ。でも、その状況は正直いいとは言えなかったわ。

入手した情報をまとめると、一二〇〇段階での敵機動部隊との距離は、四三〇海里ほど。〇六三〇の時から二〇〇海里近く離れてしまったようね。その上敵は速力二〇ノットで西に進んでいて、距離は離れることはあっても縮まることはないって感じ。

「現状だと、日没まで攻撃できる見込みはないわね……」

翔鶴姉は、ハアツと大きな溜め息を吐いたわ。祥鳳の仇を取るんだって敵愾心を燃やしてたのに攻撃できそうにないんじや、不完全燃焼もいところだもんね。「遺憾だけど、攻撃は取り止めるしかないわね」

一三〇〇、翔鶴姉は各部隊に今日中の攻撃を中止す

る旨を打電したわ。悔しいけど、四〇〇海里以上も離れているようじゃ、攻撃隊を飛ばせっこないもんね……。

「何ですって!？」

諦めかけたその直後、翔鶴姉は状況を一変させる電報を受信したわ。それによると、青葉機が敵が針路一二〇度で反転したって報告して来たってことだったわ。

「それなら……行けるわよね、瑞鶴」

翔鶴姉はやや興奮した声で私に同意を求めて来たわ。「当然よ!　ここでやらずにいつやるっていうのよ!」

私は有無を言わずに賛同したわ。敵機動部隊に一撃を加えられるチャンス逃してなるものかって。

「分かったわ。索敵機、発艦です!」

一三二五、早速私たちは艦攻四機ずつ計八機を索敵に出したわ。この索敵で絶対敵機動部隊を見つけて叩いてやるんだから。

「第二次攻撃隊、発艦です!」

「第二次攻撃隊、行くわよ!」

一四一五、私たちは発艦準備を整えた第二次攻撃隊の矢を放ったわ。

数は、翔鶴姉が艦攻六機、艦爆六機、私が艦攻九機、艦爆六機の、計二七機。索敵に攻撃の要の艦攻を八機費やしたのは痛いわね。こういう時、索敵用の偵察機があるといいんだけどなあ。

「敵との距離から計算すると、触接時間は一六三〇頃になるわね」

つまりは、約二時間後ってことになるわね。攻撃隊を発艦させたら、空母娘にできることはない。あとは、攻撃隊から吉報が届くのを待つだけね。

「何ですって!？」

でも、受信した戦果報告は芳しくなかったわ。一六二〇、攻撃隊から届いた電報は、敵戦闘機に遭遇し、ほとんど全滅したというものだったわ。

「私、また……」

報告を聞いた途端、翔鶴姉はガクツと落胆したわ。

原因は明白。攻撃隊に護衛の零戦を随伴させなかったこと。私も翔鶴姉も祥鳳の仇討ちをすることで頭が

いっばいで、防御の方まで気が回らなかった。爆弾や魚雷を搭載して鈍重な艦載機は、敵戦闘機の格好の餌食だつて理解できていたはずなのに……!

もしも零戦を護衛に付けていたのなら、圧倒的な性能差で返り討ちにできていたはず。それだけに、功を焦り過ぎたのが悔やまれるわね。

「索敵機は帰つて来たけど……」

一六一五から一六三〇にかけて索敵機は帰投したけど、敵情は得られなかったわ。敵戦闘機が現れたつてことは、近くにいるはずなんだけどなあ。

「そんなつ!? 今更になつて……」

だけど一六四五、帰投中だった艦爆隊から、敵機動部隊発見の報告が上がったわ。すぐさま攻撃を仕掛けたいところだったけど、帰投中生存率を上げる目的で爆弾を投棄していたことで、攻撃能力を失つてたの。

「はあ……。上手くないものね……」

目的の方向に敵機動部隊は確かにいた。もしも索敵機が先に発見できていたなら、戦況はまったく違うものになつていたはず。そう思うと悔やんでも悔やみ切

れないつて、翔鶴姉は酷く落胆したわ。

その後、一八〇〇から二〇〇〇にかけて、攻撃隊の收容を行ったわ。周囲はすっかり暗くなつてたから、探照灯を照射しての着艦作業だったわ。

無事に帰投できたのは、翔鶴姉が艦攻二機、艦爆六機、私が艦攻四機、艦爆五機の計一七機だったわ。喪失機は全部で一〇機。敵戦闘機との交戦時に三機撃墜したつて戦果報告だったけど、その代償で翔鶴姉の艦攻三機と私の艦攻五機が撃墜されちゃったんだから、割が合わないわね。

その後の敵空母部隊発見時の交戦で私の艦爆一機がやられちゃつて、帰投中に燃料切れで翔鶴姉の艦攻一機が水没。これが喪失機の内訳よ。

戦果は散々たるもの。唯一の救いは、敵空母部隊の詳細を掴めたこと。

その数は、空母、戦艦各二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦六隻。叩くべき敵が分かつているのと分かつてないのとじゃ、雲泥の差があるわ。

現時点での稼働機数は、翔鶴姉が零戦一八機、艦攻

一四機、艦爆一九機、私が零戦一九機、艦攻一二機、艦爆一四機の、計九六機。これだけの数があれば、十分戦えるわ！

「ねえ、瑞鶴。やっぱり私たち、新米なのね……」

明日の戦闘に備えての準備を行っていた時、翔鶴姉が大きな溜息を吐きながら呟いたわ。

出撃前は戦果を挙げて先輩たちに認めてもらおうぞって意気込んでたつていうのに、いざ戦ってみればミスの連続。戦果は無いに等しく、徒に損害を重ねただけ。こんなんじゃ先輩たちに笑われちゃうわねって、翔鶴

姉はすっかり自信喪失してしまったわ。

「笑われるだけならまだいいけどね。加賀先輩辺りはきつく叱責しそう」

あの抑揚のない声でネチネチ言われるのを想像すると、今から陰鬱な気分になっちゃうなあ。

「二人とも。悩んでいても仕方ありませんわ。今日の至らぬところをしっかりと検証して明日に活かせば良いではありませんか」

そんな時、私たちに随伴した妙高さんが励ましてく

れたわ。

「ねっ、姉さんの言う通りです。私たちから見ても、二人は一生懸命頑張っていました。だからその……」

明日は絶対に戦果を挙げましょう」

続いて妙高型末っ子の羽黒さんが、オドオドとした声でエールを送ってくれたわ。

「そうよね。重要なのは、明日に繋げることよね。ありがとうございます、妙高さんに羽黒さん。お二人のお蔭で私、明日も挫けずに戦えそうです！」

二人に励まされて、翔鶴姉は覇気を取り戻してくれたわ。もちろん私も。

そうして明日は絶対に敵空母部隊を叩いてみせるぞってみんなで励まし合いながら、五月七日の夜は過ぎ去ったのよ。

翌五月八日〇四一五から〇四二五にかけて、私たちは索敵機の艦攻を発艦させたわ。昨日の損失を考慮して、なるべくなら艦攻じゃなくて随伴艦や別働隊の水

偵にお願いたしところだったんだけど。当日は海が荒れて水偵を出せなかったのよ。

「おつ待たせ〜。衣笠さん、到着しましたー！」

「古鷹、ただいま着任しました。指揮の方よろしくお願います」

報告を待っている間の〇五五〇、M〇攻略部隊の衣笠さんと古鷹さんが合流してくれたわ。これで守りの方はより堅強になったわね。

「瑞鶴、来たわよ！」

〇六三〇、早速敵機動部隊発見の報が受信されたわ。続いている〇六四〇の電報によると、敵機動部隊は方位二〇五度二三五海里、針路一七〇度を一六ノットで航行中とのことだったわ。

「瑞鶴、早速発艦よ！」

「分かつてる！ 第一次攻撃隊、行つけえー!!」

〇七一〇から〇七一五にかけて、私たちは力強く弓矢を引き絞ったわ。

その数は、翔鶴姉が零戦九機、艦攻一〇機、艦爆一機、私が零戦九機、艦攻八機、艦爆一四機の計六九

機よ。今回は零戦を随伴させないミスは犯さない。これで確実に敵空母を沈められるはず！

そして、今手元にある艦載機は、僅か二〇機。それも零戦が一九機で、後は艦攻が一機だけ。第一次攻撃隊が帰艦しないと、第二次攻撃隊の編制は不可能。まさに乾坤一擲の大勝負ね！

「瑞鶴、上空警戒機を忘れないでね」

「うん。分かつてるよ、翔鶴姉」

敵は既にこっちの存在に気付いている。正確な位置までは分かつてないだろうけど、敵艦載機は必ずやって来る。そうして私たちは続け様に、零戦三機を発艦させて警戒に当たらせたのよ。

「瑞鶴、来るわよ！」

〇七四〇、偵察に出た翔鶴姉の艦攻から、敵艦載機約三〇機がこっちに向かっていると報告があったわ。

いよいよ対空戦が始まるのねって、私はより一層気を引き締めたのよ。

「翔鶴姉、来たわよ！」

〇七四八、上空から敵機が襲来するのが見えて、私

は警戒心を強めながら矢を放ったわ。

「あつ、あれっ?」

「ただ〇八〇五、その敵機が味方機だと判明したのよ。」

「やつ、やだつ、私ったら……」

緊張するあまり味方機を誤認するなんて。私は恥ずかしさと情けなさで、顔が真っ赤になっちゃった。

「どんまい、瑞鶴。少し気を張り過ぎてるみたいね」

気を落ち着かせる意味でも一度艦載機を収容して精神を統一してから戦闘に臨んだ方がいいわって、翔鶴姉は私を宥めてくれたわ。

「分かったわ、翔鶴姉」

私は翔鶴姉の言葉に従って、上空警戒に当たっていた艦載機を着艦させて、大きく深呼吸をしたのよ。

（落ち着け、落ち着け私……）

私は心の中で必死に自分を律しようとしたわ。敵機は間もなく飛来するだろう。その時こんなあたふたした状態じゃ満足に戦えやしない。気を落ち着かせて万全の体勢で臨まなきゃって。

（ダメッ……）

「ただ、自分に言い聞かせれば言い聞かせるほどますます落ち着かなくなっちゃって、私は泥沼に陥ったような気分になったわ。」

「瑞鶴、直衛機を展開させて、早く!」

そんな時だったわ。翔鶴姉が鬼気迫る声で私に呼びかけて来たのは。

「えっ!」

ハッとして上空を見つめると、そこには飛来する敵の編隊があったわ。

「しっ、しまっ!」

自問自答するあまり、警戒を完全に怠ってたわ。早く零戦を展開しなきゃ……ってまっ、間に合わない!」

「危ない、瑞鶴!」

「えっ!」

上空から降り注ぐ爆弾。もう回避できないと思った瞬間、翔鶴姉が、私の前に出て……。

「あああ!」

「翔鶴姉!」

〇八五七、突如として飛来した敵爆撃機の攻撃で、翔鶴姉は私を庇うように被弾しちゃった……。

「翔鶴姉、翔鶴姉ー！ しっかりー！」

直撃弾二発を食らって炎に包まれる翔鶴姉に、私は悲痛な声で叫び続ける。

イヤよ、イヤッ！ 私のせいで翔鶴姉が、翔鶴姉が

……。

「あああー!?」

私は錯乱するように上空の敵機を睨みながら、弓矢を構えたわ。私の大切な翔鶴姉を傷付けるだなんて、絶対に許さない!!

「はあ、はあ……」

決死の攻撃で何とか敵機は撃墜したり撤退して行ったりしたけど、翔鶴姉の火は全然消えそうにない。

「待ってて、翔鶴姉、今っ！」

急いで消火するわって、私は翔鶴姉に近付いたわ。

「えっ!？」

だけどその直後、また敵機が飛来して……。

「きゃああー!？」

〇九四〇、敵艦載機は満身創痕の翔鶴姉にトドメを刺すように、再び爆弾を投下したのよ。

「くっ! どうして翔鶴姉ばかり……」

一発の爆弾を食らって、より一層炎が激しくなる翔鶴姉。自分が無傷な中翔鶴姉ばかりが傷を深めていて、私の精神はどうかかなりそうだった。

「瑞鶴、落ち着いて！ 今戦える空母娘はあなただけなんだよ！」

「翔鶴の手当ては私と衣笠で行います。だから！」

〇九五〇、私たちの後方で警戒に当たっていた衣笠さんと古鷹さんが近付いて来て、私に戦うよう鼓舞してくれる。

「二人とも……」

そうよね。今戦えるのは私だけ。ここで私を取り乱したら、文字通り艦隊は全滅しちゃう。

「ありがとう、二人とも。翔鶴姉のこと、お願いね」

私は気を取り直して、対空戦闘を行ったわ。その結果、四〇機ほどの敵機を撃墜したわ。

「んんっ……」

二人の消火作業の甲斐もあって、翔鶴姉は鎮火すると共に意識を取り戻してくれたわ。

「翔鶴姉ー！」

私は翔鶴姉の声を聞くと居ても立ってもいられなくなつて、急いで近付いたのよ。

「翔鶴姉、大丈夫!？」

「ええ、瑞鶴。何とか生き延びたわ……」

翔鶴姉の傷は深かったけど命に別状はなくなつて、私はホッと胸を撫で下ろしたわ。

「でも、飛行甲板のダメージは深刻ね……」

右肩にかけられた翔鶴姉の飛行甲板はすっかり焼失してしまつて、もう艦載機の着艦は無理そうだった。

発艦は矢を射る形のできるけど、飛行甲板が使えないと、帰投した艦載機に補給したり矢の形にしたりする作業は不可能。翔鶴姉は、空母としての機能をほぼ喪失しちゃつたのよ。

「そう……。翔鶴姉、撤退して！」

私は思い切つて進言したわ。翔鶴姉はもう戦えない。だったら敵機が撤退した今、安全圏に回避すべきだった。

て。

「瑞鶴?……できないわ、そんなこと」

でも翔鶴姉は、頑なに拒否したわ。

「どうして!?! 自分で戦えないつて分かつてるんではないの!?! 私は今以上翔鶴姉が傷付く姿は見たくないの!?!」

だから撤退してよつて、私は声を荒げて訴えたのよ。「だってそうしたら、あなた一人になつちゃうじゃない」

瑞鶴一人だけ残すのが心配だつて、翔鶴姉は意固地になつて一向に撤退しようとしなない。

「翔鶴姉……」

そこまで私のことを心配して……。でもやつぱり、今は翔鶴姉の身の安全を優先したいな。

「翔鶴姉、ありがとう。私の身を案じてくれて。だけど、心配なのは私も一緒。私は一人でも大丈夫だから私は芯の通つた声で翔鶴姉に語つたわ。ここで少しでも弱気になつちゃつたら、翔鶴姉は退いてくれない。自分の強さを見せれば、絶対頷いてくれるはずだつて。

「瑞鶴……。分かったわ、あなたの想いに応える意味でも、大人しく撤退するわ。艦載機はお願いね」

「うん。ありがとう翔鶴姉……」

一〇二〇、私の思いは通じて、翔鶴姉は撤退に応じてくれたわ。これで安心して作戦に従事できるわって、私は安堵したのよ。

「衣笠さん、古鷹さん。引き続き翔鶴姉の護衛をお願いします。それと、夕暮と潮にもお願いするわ」

「了解！ 衣笠さんにお任せ！」

「はい。任務了解しました」

「わっ、分かりました。がっ、頑張ります！」

四人とも私のお願いは素直に応じてくれたわ。

一〇三〇、そうして翔鶴姉は衣笠さん、古鷹さん、

夕暮、潮に護衛されて撤退を開始したのよ。どうか道中無事で、翔鶴姉……。

（私に、できるかな……）

翔鶴姉の背中を見送った後、私は不安に駆られたわ。

翔鶴姉が戦線離脱したことは、後は私が指揮しなきゃならなくなるってこと。翔鶴姉の指揮をずっと側

で見て来たけど、私にできるのかなって……。

（ううん、悩んでる場合じゃない。やらなきゃ！）

自分から撤退してって言ったんだ。翔鶴姉を心配させないためにも頑張らなきゃって、私は自分に気合を入れたのよ。

一一一〇から一二三〇にかけて、私は帰投した艦載機の収容を行ったわ。

攻撃を終えて帰って来られたのは、翔鶴姉の艦載機が、零戦九機、艦攻六機、艦爆七機、私のが零戦八機、艦攻四機、艦爆一二機の、計四六機よ。

出撃時が六九機だったから、戦闘で二三機喪失したことになるわね。帰投した艦載機の中で一二機は修理不能なほど損傷が激しくて、実質は約半数の機体を失ったことになるわ。

味方の犠牲は甚大だったわ。でも、戦果は十分にあった。サラトガ型空母撃沈（確認）、ヨークタウン撃沈確実ト認ム。一隻は不確実だけど、最低でも一隻は撃

沈できたわ。祥鳳の仇討ちは十分叶ったわねって、私は戦果報告を喜んだのよ。

だけど、戦いはこれで終わりじゃない。MO作戦の主目的は、ポートモレスビーの攻略。対空母戦は前哨戦に過ぎない。これだから本番なのよね……。

(もうこれだけしか残っていないのね……)

現状で使用可能な艦載機は、零戦二四機、艦攻六機、艦爆九機の、たった三九機だけ。しかも艦攻の数機は索敵に用いないといけないから、攻撃戦力はもつと少なくなる。何機かは修理すれば使用可能だけど、それでも数日の時間を要するわ。

とてもじゃないけど、この数でのポートモレスビーの攻略は不可能。そう判断して、私は一八〇〇に明日の攻撃は無理だつて各部に通達したのよ。

だけど、聯合艦隊から出された命令は、作戦続行だったわ。私は九日以降、命令に従って補給と艦載機の修理に勤しみつつ、周辺海域の索敵を行ったわ。

だけど、十日の索敵で撃沈した油槽船が漂流しているのを発見したくらいで、他に敵の姿はなかったのよ。

敵部隊は撤退したと見て間違いないわね。

(修理して何機かは使用可能になったけど、やっぱり足りないなあ)

昨日の午後の時点で、艦攻二機、艦爆四機の修復は終わったわ。それでもまだ五〇機に満たず、作戦遂行可能な機数とは言えないわね。

そんなMO機動部隊の惨状が理解されて、一三三〇、聯合艦隊よりMO作戦の延期が発令されたわ。

(悔しいなあ。艦載機があれば、ポートモレスビーを攻略できたのになあ……)

敵の攻撃が苛烈を極めたのもあるけど、それ以上に私たちのミスが大きかったわ。一航戦、二航戦の先輩たちなら、鮮やかに作戦を成功に導けたんだろうなっと思うと、悔しい思いで胸がいっぱいになっちゃう。

そうして私たちは禍根を残したまま、内地へと帰投したのよ。

重傷を負った翔鶴姉は、呉の海軍病院へ収容された

第二章・カ号作戦～機動部隊最後の勝利～

一航戦、二航戦の先輩たちが戦没したことで、第一機動部隊は自動的に解散。私たちは新たに編制される第三艦隊配属になったわ。

この艦隊はミッドウエーの戦訓を踏まえて、「航空決戦を主目的とし、空母娘が中核となり、他艦娘はこれに協力する」という方針に基づいて編制されたの。

つまり、従来の戦艦を中心とした艦隊決戦から空母機動部隊中心に、兵術思想を一大転換したってわけよ。また、搭載艦載機も従来は各二機だったんだけど、艦戦艦爆二七機、艦攻一八機に改められたわ。艦攻の攻撃力は絶大だけど、その分消耗も激しい艦種だから、攻撃の要を艦爆中心にして、護衛の艦戦も増やしたってわけよ。

相変わらず索敵は艦攻頼りだから、早く艦上偵察機が欲しいところね。M I作戦で蒼龍先輩に搭載されていた二式艦上偵察機が配備されればいいんだけど。

そして私と翔鶴姉は、五航戦から一航戦に繰り上がったわ。私たちが主力なんだから仕方ないんだけど、できるなら勇退する赤城先輩たちから受け継ぎたかったなあ。

赤城先輩は一航戦であることを誇りに思っていたわ。その名を汚さないように、新生一航戦として今まで以上に頑張らないとね！

翔鶴姉の傷も癒えて戦線復帰が叶った、昭和十七年八月。米軍に奪われたガダルカナル島の飛行場を奪い返すため、同海域では激戦が繰り広げられていたわ。

私たちはソロモン諸島の要地を奪回せんとするカ号作戦に従事するため、八月十六日、トラック泊地に向けて柱島泊地を抜錨したのよ。

その最中の八月二十日、ショートランド泊地を出撃した二式飛空艇が、敵空母部隊を発見したわ。この報告を受けた聯合艦隊は、前進部隊である第二艦隊と私たち機動部隊をガダルカナル島方面に進出させること

にしたのよ。

私たちは二十一日〇五〇〇、洋上で前進部隊と合流したわ。その後機動部隊は二十四日に揚陸予定の第二梯団の進出を支援する目的で、前進艦隊から分離して南下したのよ。

作戦海域に到達した二十四日〇二〇〇、私たちは命令によって支隊を分離することになったのよ。支隊は龍驥先輩を中心として、利根さん、時津風、天津風が護衛を務める編制になったわ。

「ほな、行って来るで、二人とも」

龍驥先輩は分離前、私たちに別れの挨拶をしに来たわ。龍驥先輩は空母としての規模は小さいけど、実戦経験豊富な空母娘。鳳翔さんが半ば引退する形で内地勤務になったから、戦場にいる唯一の先輩だったりするわ。

「残念です。龍驥先輩と一緒に戦えるのを楽しみにしていたのに」

龍驥先輩とは開戦以来、同じ部隊で戦ったことが一度もなかった。これが初めてだったんだけど、命令で

離れ離れになっちゃうのは残念ね。

「なあに。またすぐに合流できるさかい。本隊をしつかりと頼んだで、瑞鶴。何せあんさんはうちのお気に入りやからな」

「えっ？ お気に入りって？」

一体どんな理由でなのかな？

「これや、これ！」

「きやつ！ なっ、何するんですか！」

龍驥先輩が突然胸当ての脇から手を入れて胸を鷲掴みして来て、私はギョツと驚いたわ。

「この胸部装甲や！ 何せ赤城たちもあんさんの姉も大型空母娘はみいんなごつつ立派な胸部装甲誇ってるからなあ。瑞鶴はうちよりかはあるかもしれへんが、他より薄いからなあ」

身体はうちよりおっきいのに胸部装甲は同じくらいだから気に入ってるんやって、龍驥先輩は私を褒め称えるんだけど……。そんな理由で気に入られたって嬉しくないです!!

「龍驥よ。挨拶はそのくらいにしておくのじゃ。作戦

カ号作戦（8月期）参加艦娘

機動部隊

本隊

第一航空戦隊 航空母艦翔鶴、瑞鶴、龍驤

第十駆逐隊 駆逐艦風雲、夕雲、卷雲、秋雲

第十六駆逐隊 駆逐艦時津風、天津風、初風

駆逐艦秋風

前衛

第十一戦隊 戦艦比叡、霧島

第七戦隊 重巡洋艦熊野、鈴谷

第八戦隊 重巡洋艦利根、筑摩

第十戦隊 軽巡洋艦長良

第十九駆逐隊 駆逐艦浦波、敷波、綾波

前進部隊

本隊

第二戦隊 戦艦陸奥

第四戦隊 重巡洋艦愛宕、高雄、摩耶

第五戦隊 重巡洋艦妙高、羽黒

第四水雷戦隊 軽巡洋艦由良

第九駆逐隊 駆逐艦朝雲、夏雲、峯雲

第十五駆逐隊 駆逐艦黒潮、親潮、早潮

航空部隊

第十一航空戦隊 水上機母艦千歳、山陽丸

海域に向かうぞ」

そんな時、利根さんが苦笑しながら龍驥先輩を呼びかけたわ。

「すまへん、すまへん。今向かうわ。ほな、またなく〜！」

そうして龍驥先輩は満面の笑顔を見せながら、利根さんの元へと向かったのよ。

「さあ、行くわよ。時津風と連装砲くんも付いて来なさい！」

その後ろ姿を追うように、天津風と時津風も合流して行つたわ。

「ねえ、翔鶴姉。天津風のアレ、何なのかしら？」

私は天津風に付き従う、珍妙な物体を指差したわ。

小型の舟に乗って、頭に連装砲を付けている小型な物体。本人は連装砲くんって呼んでたけど、どんな存在なのか気になって仕方ないなあ。

「さあ。私も詳しくは知らないけど、天津風は次世代駆逐艦娘のプロトタイプって話よ」

だからあの連装砲くんも、次世代駆逐艦娘用の新兵

装の試作品じゃないかしらって、翔鶴姉は推論を言ってくれたわ。

「喋るのかな、アレ」

一応目と口みたいなのは付いてるけど。合流したら、話しかけてみたいわね。

そんな感じで支隊の四人は分離して、南西の作戦海域へと向かつて行つたわ。

(龍驥先輩、どうか無事で……)

龍驥先輩に搭載されている艦載機は、零戦二四機に艦攻九機の、計三三機。その数は私たち一人の半分にも満たない。正直それだけの数じゃ、敵空母部隊との戦闘は無理だろう。

敵空母部隊と会敵せずに作戦を遂行してください。

そう願わずにはいられなかったのよ。

〇四一五、作戦海域に到達した私たちは、艦攻一九機を索敵に発艦させたわ。続けて〇九〇〇、水偵六機が索敵に出たわ。今回は天候もそれなりに良好で、水

偵に偵察を任せられるのは大きいわね。

最初に索敵に出た艦攻は、所属不明の潜水艦が浮上しているのを発見したくらいで他に敵情を得ず、〇九一七までに全機帰投したわ。

今のところ前進部隊からの報告もないみたいだから、水偵の報告に期待したいところね。

「翔鶴さん、二号機より敵大部隊発見、敵戦闘機の追跡を受けているとの報告がありました!」

一二二五、筑摩さんから敵艦隊発見の報告があったわ。

「了解です。第一次攻撃隊発艦! 行くわよ、瑞鶴」

「うん!」

一二二五、私たちは第一次攻撃隊を発艦させたわ。

数は翔鶴姉が零戦四機、艦爆一八機、私が零戦六機、艦爆九機の、計三七機だったわ。

「筑摩二号機は敵に撃墜された可能性が高いです。比叡さん、筑摩さん、触接用の水偵の発艦をお願いします」

「了解! 気合! 入れて! 行きます!!」

機動部隊航行序列

前衛隊

鈴谷 熊野 霧島 長良 比叡 筑摩

本隊

駆逐艦 翔鶴 駆逐艦

駆逐艦 瑞鶴 駆逐艦

「了解です。筑摩、準備万端、発艦です！」

続いて比叡さんと筑摩さんが水偵を発艦させたわ。これで確実に敵艦隊を攻撃できればいいんだけど。

「！この感じは、来るわ！」

それから間もなく、翔鶴姉が何かを感じ取ったように、声を上げたわ。

「翔鶴姉、ひよっとして！」

「ええ。電探が敵機を察知したわよ」

電探。それは電波を発信させることで対象物までの距離や方向を測定する装置よ。ミッドウェーの戦訓を元に、本格的に投入されたのよ。

ミッドウェーの時も日向さんに試験的に装備されたんだけど、その時は使う機会がなくなって、これが初めての実戦使用になったわけ。

「数は分かる？」

「そこまでは。でも、向かって来るのは間違いないわね」

「了解！ 対空戦闘用意！」

私はコクリと頷いて、敵機の来襲に備えたわ。

「来たわ！」

そして一三一〇、翔鶴姉が探知した敵機が来襲したのよ。数は急降下爆撃機二機で、翔鶴姉の右舷から急降下爆撃を繰り返して来たわ。

「回避してみせます！」

予め来襲が分かっていたから、翔鶴姉は颯爽と回避して事無きを得たのよ。

「第二次攻撃隊、発艦してください！」

敵機が過ぎ去った一四〇〇、私たちは第二次攻撃隊を発艦させたわ。数は翔鶴姉が零戦三機、艦爆九機、私が零戦六機、艦爆一八機の、計三六機よ。

「支隊は攻撃終了後、可能な限り本隊と合流してください」

一四五五、敵の攻撃が激しくなることが予想されるから、翔鶴姉は支隊に打電したのよ。

「何ですって!? そんな……」

しばらくして支隊から電報を受信したんだけど、受け取った瞬間、翔鶴姉は言葉を震わせたわ。

「翔鶴姉！ まさかっ!？」

この感覚、あの時と似ている。そう、祥鳳を失った

あの時に。もしかして、龍驥先輩の身に何か!?

「瑞鶴、落ち着いて聞いてちょうだい。龍驥先輩からの電報よ。『一三五七、我敵機ノ来襲ヲ受ケ、被弾炎上。

後、火災鎮火ナレドモ、傾斜二〇度。復元ノ見込ミ無し。……どうやらうち、これまでのような。先に赤城たちの所へ行ってるで。あんさんたちはまだ来るんじゃないで。ほな、さいならな二人とも。あとのことは頼んだで……』」

「!?」

それは、龍驥先輩が瀕死の中打った電報だったわ。

自分の命運がこれで尽きると悟ったからこそ、最後の最後、私的な言葉で締め括ったのね……。

「!」

電報を聞き終えた瞬間、私は最大戦速で部隊を離れようとしたわ。

「待ちなさい、瑞鶴! 行つては駄目よ!!」

そんな私を、翔鶴姉は腕を掴んで制止しようとするのよ。

「行かせてよ、翔鶴姉! このままだと龍驥先輩沈ん

じやう! 私はもう、先輩たちに先立たれるのは嫌なのよ!!」

今から行けば助かるかもしれない。だから行かせて、行かせてよ、翔鶴姉!!

「今は作戦中よ。勝手に部隊を離れるのは軍紀違反よ!」

「軍紀が何よ! 仲間一人の命より、そんなのが大切だつていの!!」

懲罰なら後からいくらでも受けてあげるわ。龍驥先輩の命に比べたら、安いもんよ!

「いい加減にしなさい!」

そんな時だった。翔鶴姉がパンッと私の頬を叩いて……。

「えっ……翔鶴姉……?」

一瞬何が起きたか分からなくて、私はしばし呆然としたわ。

「頭を冷やさない、瑞鶴! 今は艦隊行動中よ。あなた一人の身勝手、他の仲間を危険に晒すことになるのよ!!」

「あつ……」

一人の命を優先するあまり、多くの命を奪う事態にもなる。それが戦争よつて言われて、私は正気に戻ったのよ。

「龍驥先輩はこう言ったのよ。『あとのことは頼んで』って。それは任務を全うしなさいって言う、龍驥先輩の最期の言葉よ。あなたは大切な先輩の遺言を台無しにするの!？」

「……」

そうだ。龍驥先輩は私たちに託したんだ。この戦いを勝利に導いて欲しいって。今私が助けに行ったら、その想いを踏みにじることになる……。

「分かったよ、翔鶴姉……」

私は唇を噛み締めながら、足を止めたわ。

「ええ。それでいいのよ、瑞鶴」

翔鶴姉はいつもの笑顔に戻って、艦載機の帰艦に備えるべく、私から距離を取ったのよ。

(あつ……)

離れる翔鶴姉の背中を見て気付いた。僅かに震えて

いるのを。

(泣いているんだ、翔鶴姉……)

翔鶴姉は涙を見せない。でも、背中で泣いているのは分かった。

(そうだよね、そうに決まってるよね……)

翔鶴姉だつて、龍驥先輩を助けたいんだ。だけど、艦隊旗艦として身勝手な言動は取れないから、必死に自分の気持ちを抑えて私を叱ってくれたんだ。

(ゴメンね、翔鶴姉。いつも大変な役ばかり押し付けて……)

私よりちょっとだけ竣工が早かっただけで、一番艦として誕生した翔鶴姉。艦齢は一ヶ月しか変わらないのに、姉というだけで私を優しく宥めてくれたり、至らなさを叱ってくれたりする。

だけど、経験は私と同じなんだし、まだまだ新米なんだ。そんな中でも、私以上に亡くなった赤城先輩たちの後を継ごうって、必死に頑張っているんだ。

(もっと、しっかりしなくちゃね!)

もう二度と今回のように身勝手な行動を取っちゃ駄

目。翔鶴姉を支えるように行動しなきゃって、私は心に強く誓ったんだ。

一六三五から一七〇〇にかけて、第一攻撃隊が帰投したわ。その戦果報告を確認すると、空母一隻大火災、もう一隻に火災を発生させたみたい。

他に敵機一二機以上を撃墜できたみたいだけど、私たちの艦載機の損害も大きかったわ。

自爆及び未帰還機、零戦三機、艦爆一七機。被弾不時着機、零戦三機、艦爆一機。無事収容できたのは、僅か一三機だけ。

全部で二四機、約三分の二の艦載機を失ったことになるわ。

それだけの犠牲を払ったにも関わらず、撃沈には至ってない感じ。ここで最低でも一隻沈めて、龍驤先輩の仇討ちをしたいのよ！

私は悔しがりつつ、第二次攻撃隊の追撃に期待したのよ。

だけど、第二次攻撃隊は敵艦隊を発見できないまま、一八一五から二〇二〇にかけて着艦したわ。

第三次攻撃は夜間雷撃を以て行う予定もあつたんだけど、敵に接触している艦載機もないから、攻撃を取り止めて北上したのよ。

翌二十五日一五三五、私たちは支隊と合流したわ。その時、龍驤先輩が前日の一八〇〇に沈没したって聞いたのよ。

前日の電報で助からないって分かっていたけど、改めて訃報を聞くと、悲しみを抑えることができなかつたわ……。

「瑞鶴よ。そなたに渡したい物があるのじゃ」

「えっ！ これって……」

利根さんから手渡された物。それは、龍驤先輩が愛用していたサンバイザーだった。沈み逝く中、形見について龍驤先輩が私に渡すよう利根さんに託した物だった話だったわ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、龍驤先輩……。仇を取れなくて、ごめんなさい……」

私はサンバイザーをぎゅっと抱き締めながら、大粒の涙をばたばたと零したわ。私たちが未熟だったばかりに、敵空母にトドメを刺すことができなかった。この仇はいつか必ず取る。そうソロモン海に眠る龍驤先輩に誓いながら、私たちは帰投したのよ。

同年十月になっても、ガ島を巡る熾烈な攻防は続いていたわ。日に日に日本が不利になっていく戦局ではあったけど。

それだけに、十月十三日の深夜から行われた金剛さんと榛名さんによるヘンダーソン飛行場砲撃の成功は、久々に聞いた吉報だったわ。

その成功に乗じるように、十月下旬、ヘンダーソン飛行場に総攻撃を行う作戦が発令されて、機動部隊はその支援に当たることになったのよ。

「戦場で一緒に戦うのは初めてですね、翔鶴さん、瑞鶴さん」

出撃を前に、私たちに瑞鳳が話しかけて来たわ。実

は彼女も新生一航戦のメンバーだったんだけど、今まで一緒に戦ったことはなかったんだよね。

「あのっ……珊瑚海ではあなたのお姉さんを守れなくてごめんなさい！」

開口一番、私は自分の至らなさを謝罪したわ。瑞鳳に会ったらずっと謝りたいと思っていたのよ。今日ようやくやく叶って、胸のつかえが取れた感じがしたわ。

「ううん。瑞鶴さんが謝ることじゃないよ。お姉ちゃんとは部隊が違かったんだし」

それよりお姉ちゃんの仇討ちに協力してくれる？
って、瑞鳳は話しかけて来たわ。

「ええ。もちろんよ！」

私は元氣よく答えたわ。事前に察知していた敵情から、敵機動部隊がソロモン海域に出没する公算が高いことは分かっていたわ。

もちろん、それらの空母部隊は祥鳳の仇だけじゃなく、赤城先輩たちの仇でもある。ここで亡くなった空母娘たちの仇を取るんだって、私は敵愾心をたぎらせたのよ。